

ひきこもり、を理解しよう パート3

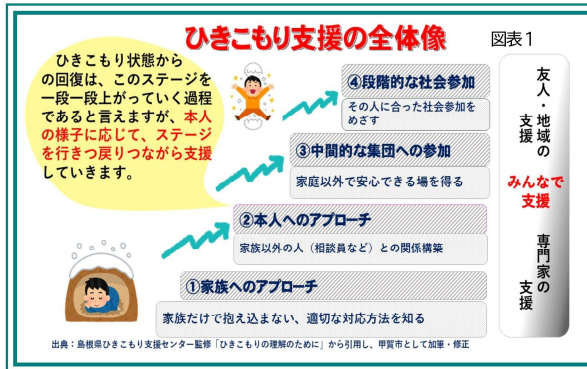
# ひきこもり回復は、安心/安全な環境と理解してくれる人の存在

# 懐かしい未来新聞

①まず、第一歩として本人にいちばん近い存在である家族が、本人のひきこもり状態について正しく理解することが大切です。

こは、専門家を交え、家族との個別相談を重ねながら、家族がどのように本人と向き合おうかを考えます。

②家族と本人が良い関係を築けるように支援しながら、本人との来所相談、家庭訪問へつなげていきます。



「ひきこもり」とは、病名ではなく、症状・状態を表す言葉です。前号(新聞第6号)では、本人を中心に家族や社会との接点が必要なことを示しました。今回は、支援者が4つのステージごとに、どのように関わっていくかを示します。

甲賀市は、どのステージでのスタート(出会い)であっても、行きつ戻りつしながら、支援する姿勢で臨みます。

③家族以外の他者(例えば支援者)と本人と1対1の関係ができれば、本人は家庭以外の場と他者と交流し、社会経験を積み重ねます。小さな集団で役割を作り、本人の自信につなげます。もし、支援者がこのステージからの出会いであった場合も、継続的な支援のために、本人、家族への個別の支援は必要となります。

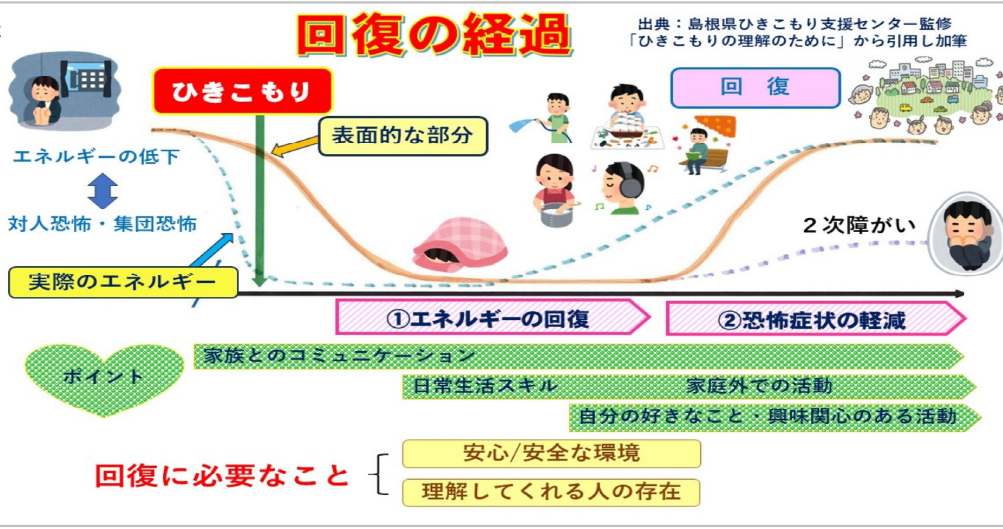
④ゴールとしては、就学、就労にこだわらず、本人に合った居場所や活動、社会参加をすることです。

下記表2は回復の経過を示しますが、回復には、理解してくれる人の存在と安心・安全な場所づくりが必要です。

友人や地域の方になつてくれそうな人がいれば、「傾聴」を基本に関わっていきましょう。

ファーストコンタクトは慎重に行う必要があるので、専門家や行政の相談窓口と一緒に、みんなで支援していく体制を作ります。

図表2



発行：甲賀市  
地域共生社会推進課  
連絡先 内線1356  
0748-69-2155

★ 本号の紙面  
★ 「ひきこもり」を理解しよう3  
★ 話題 甲賀市ひきこもり支援指針  
★ 地域の資源あれこれ サニーデイズ  
★ 重層物語 シーズン3 中編

R4年11月～スタート

**地域の資源 あれこれ**

訪問看護・訪問リハビリテーション

**サニーデイズ**

不登校児の健康管理、相談、運動不足解消

不登校の子どもさんは、昼夜逆転の生活になったり外出しない事から筋力や運動機能が低下すること、家族が孤立しがちであることが課題となっています。

サニーデイズでは週に1~3回の訪問で個々の発達に合わせたリハビリや運動を行い、小さな成功体験を積み重ねることで自尊心を高め、子どもさんの心の安定を目指します。

ます。外出が難しい子どもさんなどはフリースクール等へ行くことが難しい時がありますので、まずは訪問で本人や保護者さんの健康相談や不登校の悩みに寄り添いサポートします。もちろん、不登校の子どもさんだけではなく、成人期にも対応します。

岩倉浩司 代表  
事務所 水口町虫生野  
連絡先 0748-78-0590



甲賀市におけるひきこもり支援、対策については、**つながる場づくり、参加支援**に重点を置いていきます。本人が興味関心を持ち、「これなら少しだけならやってみようかな」との思いから、居場所

甲賀市におけるひきこもり支援、対策については、**つながる場づくり、参加支援**に重点を置いていきます。本人が興味関心を持ち、「これなら少しだけならやってみようかな」との思いから、居場所

**甲賀市 重層的支援体制整備事業における ひきこもり支援指針**  
2023年9月現在 今後内容を更新していきます

- 将来のめざす社会像**  
誰もが社会から孤立することなく、ありのままの自分が認められ、いつでも小休止でき、多様な生き方を選択し、希望をもって安心して暮らせる甲賀市
- 3年後のめざす社会像**  
甲賀市民のひきこもりに関する正しい理解を促進し、当事者・家族・社会の「つながり」の回復に向けて、当事者やその家族に寄り添った支援体制づくりを(福祉・教育・まちづくり機関等)進めることにより、ひきこもり支援に関する甲賀市全体の機運が醸成される。

**甲賀市ひきこもり対策事業 行動計画**

- ・つながる場(居場所)づくり、参加支援
- ・クロス人材の育成
- ・市民への啓発、広報
- ・ひきこもり支援のネットワーク構築、見える化
- ・個人の状態の指標づくり

**甲賀市でのひきこもり支援**



# うまくいき過ぎた重層物語 SEASON 3 中編

前号に引き続き『ある対話から未来へ』と題して重層物語をお届けします。

【前号までのあらすじ】

「生活が苦しいのに、なぜ臨時給付金の対象にならないのか」と、窓口にやってきた共田さん。その対応をする生駒主査は、ある疑問にぶつかり考え込んでしまいました。

「支える側と支えられる側を制度の基準値でバツサリ切り分ける社会保障のあり方に、未来はあるのだろうか……」

○共田（ともた）さん… 67歳

妻（59）と娘（28）と3人で暮らしています。現役の頃には、建設業でバリバリと働いていましたが、50歳を過ぎた頃に精神的な不調によって、うまく会社に復帰できぬまま早期退職しました。現在は工場の夜間警備（週2回）で得た収入と年金で生計を立てています。

○生駒（いこま）主査… 39歳

市役所職員。福祉部局に異動となり5年目。窓口対応や相談業務をしており、ややストレートな物言いでトラブルになってしまうこともありますが、相手の話を傾聴し、しっかりとした説明責任を果たすことをモットーに日々業務にあたっています。

「……」

「生駒君、まだ考えてるんか？」

「はい。臨時給付金の対象外です。と返答するだけでは、単に制度説明であって、相談支援ではないと思ってしまう……」

「生駒君ええか？ ワシはな、不眠がちで調子の悪い日が多いけど、そんなに障がい手帳には該当せえへんし、嫁さんは腰痛で身動きがとりにくいけど、介護認定はされへん。日常生活を送るだけで「苦労やねん」

「確か、娘さんがいらつしやるかと。手伝ってはもらえませんか？」

「娘はなあ、大学まで順調に行きよったけど、最初の会社でうまくいかなくてな。まあ人間関係やろな。今は何とかパートに出てるけど、ひきこもってた時期もあるから、強く言えへんわ」

「それでしたか……」

「それになあ。家建ててすぐにワシが調子崩して仕事辞めたもんやから、住宅ローンはたつぷり残ってるし、おまけに、先月嫁さんが車で事故しよってなあ……」

「いろいろと重なったんですね……」

「正直言つとなあ、福祉の窓口に来て文句言つような自分の姿は想像でけんたわ。まさかワシがなあ。それとな、思い切つて来たのに、何のサービスにもかからへんことが、一番のまさかや」

「それで、たちまちのお金が必要やったわけや」

「共田さん。暮らしの困りごとや生きづらさは、何かの制度やサービスの対象になりましたか？」

「だから、何のサービスにもかからへんってなんへんも言ってるやろ。そうなんです。だから、『支えられる側』と『支える側』を基準数値で切り分けるような二分法の社会保障では立ち向かえないのが、これからの時代なんです」

「だからどうしたらええんや。それを教えてくれ」

「おそらく、『支えられる側』と『支える側』という線引きをしない支え合いが必要や」

「あんたは、分かったような分かんないことを言つなあ」

「そして、線引きをしない支え合いの入り口として、私はまず、共田さんの「制度にかからない困りごと」を受け止めることをしたいのです」

「よう分からんけど。まあ、話を聞いてくれるんやな」

「はい。もう少し今の暮らしについてお伺いしても大丈夫ですか？」

「かまへんで。金はないけど時間だけはあささかい」

生駒主査は、共田さんから困りごとの詳細や現在の暮らしぶりを聞き取り、関連する部署や支援機関と必要な情報共有を行う旨を説明し、同意を得ました。そして、面談が終わりに近づいた帰り際……

「それでは、またこちらから連絡します。長い時間ありがとうございました」

「こちらこそおおきに。そやけど生駒君。矛盾するよつな……と言つけど、ワシみたいな困りごとやったら、他にもよつさんあるで。場合によつた

ら、特別扱いやつて不満も出るんと違つつか？」

「不満が出たら、その人の不満を聞くまでです」

「いやいや市民だけやなくて。公平公正にやらなあかんって上司に叱られるんときや」

「他からの不満を避けるために、共田さんの相談に乗らない。それが公平公正なら、こんな楽な事はないですよ」

「あんたは立派やわ。かつこええわ。そやけど、一人で気張つても組織としてたへんで。ワシも組織で働いとつたからよつわかかる」

「誰一人取り残さない地域共生社会の実現には、覚悟が必要なんです」

「そやから、かつこええて言つてるやろ。生駒君の覚悟は分かつたけれど、3年経つてみいな。ちよつと前じゃ熱上げて気張つとつた子おつたなあ。あの子今どこの部署やろって。そんでしまいや」

「なるほど。確かに想像できなくはないです……」

「ひとり一人の生きづらさや困りごとを相手するのは並大抵やないで」

「確かにその通りです。もちろん、線引きを設けた巧みな制度設計に努力することも必要です。しかし、それよりも生きづらさを分かり合つ努力をしたいと思います」

「そつか、そつやな。それが必要な時代かもしれへんな。仲間が増えたらええな」

「そつですな。もちろん共田さんも仲間でしょう？」

「ワシか？ それは、行政の仲間内で頑張つてほしいわ」

「いやいやそれは違いますよ。公助や共助、自助の線引きもなしです。それが地域共生社会です。そついう時代でしょ」

「また難しいこと言つて。そないスケールの大きい話はもつええ。地域共生社会の実現は夢物語やお花畑や」

「今は夢物語でも、他人事ではなく、我が事になっていけば、いつか必ず実現すると思えます」

「分かつた分かつた。いつか実現したらええなあ。けど、地域共生社会つてよう分からんな。どんな社会なんや？」

「そつですな。どんな社会なんでしょうね」

「えつ？ ゴール見えてへんのかい」

「はい。地域共生社会はゴールではなく、手段でありプロセスですから」

「あんたは、分かりそつで分かんない」

「自分の身の回り、半径3mくらいから共生社会を始めるんです。今日、共田さんの困りごとを一緒に悩むことから始まるんです」

「ほんで、ワシも身の回りで始めたら、半径6mになんのか（笑）」

「広がったじやないですか。プロセスを重視して、気がついたら地域共生社会が実現していたという具合です」

「そつか、まあそんでええわ。ほんなら、連絡待つてますわ」

そつ言つて手をあけて、共田さんは帰っていきました。生駒主査は共田さんがにこつと笑顔を見せたので、ほつとしながら見送つたのでした。

感動のラスト、第8号へつづく (作・中井 浩喜)